

リースマンの大学論

—大衆社会にあるアメリカの大学の諸問題—

岡 本 道 雄

I

リースマンがその大学論^①で問題にするアメリカの大学には一般的に言っていくつかの型が存在すると思われる。今歴史的にこのことを少し考察してみるならば、アメリカの大学が始ったのは十七・八世紀であり、ハーヴァード・カレッジ（一六三六年）、ウイリアム・エンド・メアリー・カレッジ（一六三九年）、エール・カレッジ（一七〇一年）、等がイギリスのオックスフォード、ケンブリッジを模範とし、また宗教的教派（denomination）を基盤として設立されたことは周知のところである。これらは「イギリスの大学の仕方に従って Pro Academicum in Anglia」^② ジェントルマンの形成を目指し、同時に半ば牧師の養成を目指すものであった。そしてこの形の大学は十八世紀には、プリンストン（一七四六年）、コロンビア（一七五四年）、ペンシルヴェニア（一七五五年）等と東部ニューイングランドに次々設立され、十九世紀の当初以来西部にも進出し、アメリカ全土に数多く設立された。アメリカの大学における宗教的色彩は、時が下るに従って、denominational が interdenominational になり、自由主義的、合理主義的要素が大学の中に増し加わるにつれて、次第に稀薄になり、またオックスフォード・ケンブリッジの大学の理念も、時が下るに従って、アメリカの全ての大学を規制する原理ではなくなるが、しかし、一般的に言って、宗教

的であり、又イギリス的であるというアメリカ初期の大学の特色は、今日でも全く失われてしまったとは言えないであらう。

しかし、この様なアメリカの大学は、十九世紀にいたって重大な変化をこうむることになる。そしてこの変化は、十九世紀の初期にいくつかの代表的なカレッジが職業専門教育の機関を付設することによって始まるが、しかし決定的な変化は十九世紀後半におこり、これは既存の大学の性格を変化させただけでなく、そこには、新しいタイプの大学も出現する。そしてその結果アメリカには、今なお継続するいくつかの大学の型が生み出されることになったのである。この変化が生じた理由としては、(一)ヨーロッパ、特にドイツ流の大学の理念の導入と、(二)産業革命の影響があげられるであらう。

周知の如く、十九世紀の初頭は、ドイツの大学の見事な開花期であつた。ベルリン大学を中心として、通常フンボルトの理念と呼ばれる新しい近代の大学の理念が打建てられ、学問の自由 (akademische Freiheit) が謳われ、研究 (Forschung) の精神が強調された。そして十九世紀の中葉から後半にかけて、この様なドイツの大学——ベルリン、ライプツヒ、ゲッティンゲン等の大学——に留学するアメリカの若い学者の数も急激に増加し、後にアメリカの重要な大学の総長になる人々の殆んどが、この時代にドイツへ留学しており、彼らによって、アメリカの大学に、学問研究の精神が導入され、大学院を設け、これを強化することになったのである。皮切りになったのは一八七六年、大学院のみの大学として発足したジョンズ・ホプキンス大学であるが、これを範として、ハーヴァード、エール、プリンストン、コロンビアの様な、古いかつての小規模なカレッジが、いずれも大学院中心の大学に変貌し、専門的な學術の研究と、高次の専門職養成の機関となつて行くのである。そしてこれがアメリカにおける第一のタイプの大学である。しかしこの様な大学院中心の大学とは別に、アメリカの従来からのカレッジの中には、フンボルトの理念の影響を受けながらも、なおオックスブリッジ (Oxbridge) の伝統を守ろうとするものがある。つまりニュー・イングランド

における small three といわれるウイリアムズ、アーモスト、ウエズレイアンや、またスワスマアのように、スタッフに優れた学者を集めることによって、学問的な質の高さを保ちながらも、リベラル・アーツによるアンダーグラデュエイトの教育に主眼を置き、また学生数を制限することによって、人格的交渉を通しての陶冶を重視する小規模なリベラル・アーツ・カレッジである。そしてこれがアメリカの大学における第二のタイプである。

しかし、産業革命の波がアメリカに押し寄せてくるにつれて、そこには、社会の要請から、先のリベラル・アーツ・カレッジや大学院中心の大学とは全く異なる新しいタイプの大学が誕生する。つまり、産業革命後のヨーロッパにおいて、より高次の職業教育、技術教育の必要から、ドイツにはテヒニッシェ・ホッホシューレ (technische Hochschule) が出来、イギリスにはいわゆる Redbrick (赤レンガ建の大学) — ロンドン大学等、現実の生活の解明、改善に役立つ社会科学、技術の研究を目指す大学 — が出来たと同じ様に、アメリカにおいて農業、及び工業の専門的職業教育を改善、強化するために建てられたのが、この種の大学である。一八六二年、大統領リンカーンの時に成立したモリル法 (Morrill Act) により、この種の大学は基礎づけられる。つまり、農業及び工業の専門教育を振興させるために、合衆国政府が土地を提供し、この土地を基盤として、少くとも各州に一つこの州のための専門教育機関を設立するというのがモリル法である。この様にして建てられ、発展したのがいわゆるランド・グラント・カレッジ (Land Grant College) である。その内には、コーネル大学等の私立大学をも含むが、その殆どは州立大学である。そしてこの様なタイプの大学が、アメリカの大学における第三のタイプである。しかしこの種の大学を、その理念に関して見れば、そこにはオックスブリッジの理念等とは、全く異なる理念が見られる。すなわち「社会奉仕的大学」 'Social Service Station' University」の理念であり、真理を有用性 (Usefulness) の立場で考えるプラグマティズムの哲学がその背景にはある。そしてまた、この種の大学は、先のリベラル・アーツ・カレッジや大学院中心の大学が、学問的及び教育的な質の高さを誇り、知的文化の指導者乃至はエリート形成を目指しているのに対し

て、増大する学生数の出来るだけ多くに門戸を開き、「すべての人に対する高等教育 higher education for all」の機関たらしめとして、ところにその特色を有する。したがってこの種の大学は今日学生数が極めて多く、いわゆるマス・プロ教育の形を呈しているものが少くないのである。

以上の三つのタイプがアメリカの大学の十九世紀後半から今日までに及ぶ代表的なタイプであろうが、しかし、これらとは別に今一つのタイプをあげねばならないであろう。それは、アメリカの初期のカレッジが、最初は、宗教的な教派を母体としながらも、次第に、大学院中心の大学や、優れたリベラル・アーツ・カレッジへと発展して行った後にも、なお教派的性格を強固にもちつづけ、それ故に知的レベルを犠牲にしている数多くの小規模な教派的カレッジである。これらは主としてアメリカ南部に見られる大学であるが、これらのいわば落伍したカレッジが第四のタイプに数えられるであろう。そしてこれと共に、地方の小規模な基盤の弱い教員養成大学もこの中に含めうると思われる。

アメリカの大学は一般的にはこの様に類型化出来ると思う^④。しかし、この様な類型はあくまで理想型であって夫々の類型間の中間に属する大学も少くない。そして、又この類型間の距離をヨーロッパの国々における異った類型に属する大学間の距離と比較してみれば、距離はさ程大きいとはいえず、かえって共通面が見出されて来る。たとえば大学院中心の大学とリベラル・アーツ・カレッジはアンダーグラデュエイトの教育では共通の性格をしており、これらと州立大学の間にも、ドイツの総合大学 (Universität) と工業大学 (technische Hochschule) との間の様な差異はなく、又イギリスの Oxbridge と Redbrick との間の様な差異もない。夫々が特色を示しながらも可成りの共通面をもっているといつてよいであろう。

アメリカの大学にこの様な共通面がみられる理由の一つは、アメリカに固有なプラグマティックな傾向が、程度の差こそあれ、どの様なタイプの大学にもみられ、又程度の差こそあれ大学と社会との結びつきがあり、大学の社会に

對する責任が考えられていることであろう。そしてまた、学生にとって大学への進学は、何らかの意味で職業的成功の機会を増すものと考えられ、またどのタイプの大学へ入るのにも階層的、階級的制限はない。そしてこれらがいつでもアメリカの大学に可成りの共通面を与えることになったと思われる。

しかもこの様な共通面は、資本主義が高度に発達し、高度に工業化され、技術化された社会が出現した二十世紀にいたって、益々増大して来たように思われる。大学と社会、特に大学と産業界との結びつきは強まり、大学の職業的訓練の場としての性格が非常に強まって来たのである。そして例えば、かつては純粹に知的・人格的陶冶の機関であったリベラル・アーツ・カレッジにおいても、大学院における高度の専門職業教育のための準備機関としての性格が濃厚になって来たのである。

更にこのような工業化され、技術化された社会において、官僚制組織、マス・メディア、都市集中化の増大によって、所謂大衆社会状況があらわれて来たことは、大学の中にもまた、学生数の増加と相まって、大学の大衆化、学生の大衆化と呼びうる現象を引起して来たのである。

今日アメリカではさまざまの大学論が書かれているが、この様な大学論を見ても、そこにはこの様に職業教育化され、又大衆化された大学の問題が論じられている。そしてこの様な大学論の中には、大学の職業教育化、大衆化の現状に対して批判的な見解を示しているものが多いように思われる。

勿論一方では、ブルーバッカーやヘンダーソンの様に、主としてプラグマティズムの立場から、社会奉仕的大学の理念、及び教育の機会均等の原則に基づき、職業教育化の現状を肯定し、これを推進することが、民主主義社会における大学の在り方だと主張する可成り有力な立場も存在する。しかし一方、同じ民主主義を肯定し、民主主義的な政治形態こそが唯一最良の政治形態だと認めながらも、この様な民主主義が西欧の伝統の中ではぐくまれて来たのは、そこにリベラル・アーツ (liberal arts) への傾倒があったからだとし、リベラル・アーツ中心の大学教育論を展開

し、また大学の職育教育化を厳しく批判するハッチンスの様な人も居る。^⑧そしてまた、コナントの様に、同じく大学の現状を批判しながらも、四年制のカレッジは全てリベラル・アーツとすることによって大学の質の低下を防ぎながら、二年制のカレッジにおいて門戸を広く職業教育に開き、教育の機会均等を保つという折衷案を出す人もいるのである。^⑨

しかしこのような中であって、わたしがこの小論で取上げようとするリースマンの大学論は、一体いかなる位置づけを与えられ、またいかなる特色を有するものであろうか。端的に言ってリースマンも現代のアメリカの大学の現状には批判的な立場に立っていると言えよう。しかし、彼が批判的なのは、大学の職業教育化に対してよりもむしろ大学の大衆化に対してであると思われる。彼の大学論は、哲学者や教育学者の大学論とは違って、大学の理念を直接問題にするのではなく、社会学者としての立場から大学の現状に社会科学的分析を導入することによって、いわば大学の教育社会学といったものを展開する。そして先にふれたような諸類型に分かれるアメリカの大学が、今日の大衆社会状況の中で、いかなる共通の問題点を持ち、また夫々の類型に固有な問題点をもつかを分析的に検討する。そしてまたこれらの問題点に対するいくらかの現実的対策をも提示するのである。

しかしここで注意しなければならないのは、リースマンの大学論は、単にそれが分析的である点で特色があるだけではなく、この大学論が、『孤独な群衆 The Lonely Crowd』や『個人主義の再検討 Individualism Reconsidered』の著者であり、今日の大衆社会論の代表者の一人と目される人の手になった大学論であるところにその特色を有するということである。リースマンの大学論の背景には、当然『孤独な群衆』にみられる今日の大衆社会の分析がある。したがってわたしは、ここで彼の大学論の特徴を取出すに先立ち、先づ彼の大衆社会論の骨組みを簡単にさぐり、これとの関連で彼の大学論を見て行きたいと思う。

註① リースマン大学論は、Constraint and Varity in American Education の中に最もまことまいった形でみられるが他に Howard, M. Jones Robert Ulich との共著 the University and the New World があり、また日本での講演集『現代文明と人間性』や H.M. Rutenbeek (ed.) : Varieties of Modern Social Theory 等の中に大学教育に関するいくつかの論文がある。

註② たとえば初期のハーヴァードの卒業生のうち実社会に出るものは六〇%、牧師になるものは四〇%であったといわれる。

註③ このような類型化を考えるにあたっては、高坂正顕著『大学の理念』に負うところが大きい。

註④ Brubacher and Kudy, Higher Education in Transition

註⑤ Algo D. Henderson, Policies and Practices in Higher. Education

註⑥ Robet Hutchins, Great Conversation (田中久子訳) 一〇六頁以降参照。ハッチンスの大学論としては他に : The University of Utopia, The Higher Learning in America 等がある。

註⑦ James B. Conant, Education and Liberty

II

端的に言って、リースマンにおいては、大衆社会は「他人指向型 other directed type」の社会として把握される。つまりリースマンは、人口の出生率、死亡率との関連において、また E・フロムやアブラム・カーディナー等の新フロイト派の影響の下に、有名な三つの理想型「伝統指向型 tradition directed type」 「内部指向型 inner directed type」 「他人指向型 other directed type」という「社会的性格 social character」の三つの類型を提出しているが、この第三の類型の「社会的性格」をもった人々が支配的な社会が大衆社会である。

「伝統指向型」の社会が、いわば産業化されない低開発地域であり、また封建的な社会であり、総じてテーニスの

言う「ゲマインシャフト Gemeinschaft」であり、また「内部指向型」の社会が、資本主義の上昇期にある近代社会であるのに対し、「他人指向型」の社会は、工業化、都市化が進み、社会移動 (social mobility) が激しく、またマス・コミが発達し、豊饒な物質により生活水準は高まり、労働時間は短縮され、余暇は増大したような所謂「富裕社会 affluent society」^⑧であるが、同時に一方では、中央集権が強まり、組織化や官僚制化が極度に増大した社会である。

リースマンは、今日でもなお全人類の半数以上が「伝統指向型」の社会に住むことを認めているけれども、しかし、文明化された現代社会においては、近來、「他人指向型」の社会への傾向が、都市を中心としてあらわれており、特にアメリカにおいてはこのことが顕著であると考えている。アメリカにおける青年層と高級サラリーマンは、既にこの社会に特徴的な「社会的性格」を有しており、また官僚や、企業におけるサラリーマンの中から、次第にこのような「社会的性格」をもった新中産階級があらわれつつあると言う。そしてやがて、近き将来には、全てのホワイト・カラー、サービス従事者、全ての教育を受けた者に及ぶ勢を示していると言う。

封建的、閉鎖的な「伝統指向型」の社会においては、親やその他の大人達による子供の行動への規制力が強く、また逆に、子供達は大人をモデルにし、模倣しさえすれば、社会に適応することができ、したがってそこでは、行動の規制と模倣という形で「社会的性格」の形成が行なわれた。

しかし、社会変動や社会移動がはじまり、より開放的になった近代的な「内部指向型」の社会においては、子供は親や大人をモデルにし、自らの性格形成を行っても、そこではもはや社会への適応は困難である。したがって、親は子供の行動を規制するのではなく、子供の内的な性格構造を規制し、子供に行動の内的原理を与えようとする。子供は自己の行動の目標を自己決定的に選択しなければならぬが、その性格の基礎は親達により据えられたものであり、また彼の性格構造の内には、幼児期を過ぎた後も、両親や他の大人達からの信号を受けることの出来るような

「ジャイロスコプ的 gyroscopic」心的メカニズムがつくられており、それが彼の社会への適応を可能するのである。そしてまた、これが「内部指向型」の「社会的性格」の形成過程とその構造である。

しかしながら、「他人指向型」の社会においては、親達はなお、子供の内的な性格構造を規制しようとするが、その規制力は「内部指向型」の親達におけるが程強くはなく、また子供達は両親や大人達からの信号に対してだけでなく、もっと広範囲な人々からの信号に応じることの出来るような「レーダー radar」的メカニズムをもたなければ、社会に適応することは出来ない。

「内部指向型」の社会は資本主義上昇期の社会であり、物質への関心が強く、物質的環境を富ますための物質の生産にエネルギーがそがれた。そしてまた、この物質生産には、忍耐や企業心や自己決定的な決断力が必要とされた。また、貯蓄が美德とされ、消費がなされる場合にも、立派な家や美術品といった伝承されてきた願望の型に一致するような、また所有を誇りうるような明確な消費の目標が定められていた。

しかし、ガルブレイスによって「富裕社会」と名づけられるような、物質が生活を充足させる「他人指向型」の社会においては、物質はさほど大きな関心の対象ではない。物質よりも「他人」への関心の方が強くなってくる。そして忍耐や企業心や決断力もさほど必要ではなく、消費経済の下での「他人」との「同調性 conformity」の方がより必要な能力とされるようになってくる。つまり、フロムによって、「市場的構え marketing orientation」^⑧といわれるような「社会的性格」が、この社会の適応的な性格として生じて来たのである。

親の子供に対する教育も、性格の中に道徳的な内的規準を形成することよりも、子供の社交性を形成することに向けられる。しかも親達は、確固たる自信の下に子供の教育にあたるのではなく、そこには常に、他の親達といった「他人」との同調性が気にかけてられている。しかも子供達にとって、「他人指向型」の社会においては、親や他の大人達と共に、あるいはそれ以上に、同年輩の仲間達の「同輩集団 peer group」が、性格形成者としての、また行動

決定者としての重要な役割をはたす。その上この同輩集団は、テレビ等のマス、メディアにより、増幅・持続させられるものであり、換言すれば、「他人指向型」社会の子供達は、彼が直接に知っているか、あるいは友人やマス・メディアによって間接に知っている同輩達を、性格形成の源泉とし、また行動決定の指導者としてしているのである。更に、このような「他人との同調性」が支配する「他人指向型」社会は、政治及び何らかの改革に対しては、全くの「冷淡さ apathy」をもつ「無関心者 indifferents」を生み出すか、あるいは「内幕情報者 inside dopesters」というような、政治に関する内幕情報には通じているが、何らの行動にはいたらぬ人々を生み出す。そしてそこには「内部指向型」の社会における「道徳家 moralizer」のような、立身出世式の権力獲得への関心もないが、また秩序を改革する意欲もないのである。

以上がリースマンの分析する「他人指向型」の「社会的性格」及びそれに依存する社会の簡単な素描であるが、これはまた、他の大衆社会論者ホワイトやフロムやミルズによって夫々「組織人 organization man」、「疎外された自動人形 alienated automaton」、「ホワイト・カラー white collar」等と名づけられた大衆社会における人間の自己疎外の一面を明らかにするものであろう。そして結局リースマンのとらえる大衆社会は、「他人との同調性」および改革への「無関心」といったものを、その特徴としてもつと言えようが、しかし、では、このような彼の分析は、彼の「大学論」の中にはどのように反映しているであろうか。「他人指向型」社会における「社会的性格」が、当然現代のアメリカの大学の中に、例えば学生気質等の中に見られるであろうことは、容易に推察できるが、しかしより具体的にはそれはどのようなものであろうか。次にわたしは、このことを、彼の「大学論」中に見てみたいと思う。

註⑧ リースマンは「伝統統指向型」「内部指向型」「他人指向型」の社会的性格の型を設定するにあたって、人口統計学的カテゴリーを採用した。つまり出生率が極めて高いが、死亡率も同様に高く、このことによって、人口の増加が押えられて

いる「高度成長潜在的 high growth potential」な社会を「伝統指向型」社会と名づけ、また死亡率が衛生保健の向上、食糧の豊かさ等によって減少し、人口が急激に増加する「過度的成長 transitional growth」の社会を「内部指向型」社会と対応させた。そして更に、合理的な個人主義な態度のひろがりにより、人間の増殖が低下し、出生率が低下した「初期の人口減退」incipient decline of population」の社会を「他人指向型」社会に対応させるのである。しかし、このような人口統計学的カテゴリーを用いることに對しては、現在のリースマンは懷疑的であり、そこにいくらかの誤りがあったことを認めている。「The Lonely Crowd」のヘル大学新版序文及び日本での講演集参照

註⑨ John Kenneth Galbraith, The Affluent Society

註⑩ Erich Fromm, Man for Himself p. 67—82. 及び The Sane Society p. 146

註⑪ Erich Fromm, The Sane Society p. 185

III

リースマンがアメリカの大学の現状分析において、先づとり出している第一の問題は、「他人指向型」社会における政治的・改革的「無関心者」乃至は「冷淡さ」を反映するような、大学における改革運動 (reform movement) の減退であり、大学に対する熱情の欠如である。

リースマンによれば、初期のアメリカのカレッジには極めて強烈な開拓者精神があった。これらのカレッジの創始者達は、通常、自然の貧困は耐えしのびえても、知的・宗教的貧困を耐えしのぶことの出来ない牧師達であったから、ここでは当然牧師養成が目ざされ、また神学的論議を通しての宗派的分立がみられたが、しかしこのようなカレッジは、先にも見た如く、次第に最初の党派の・純宗教的起源を超越し發展する。そして一般的に、当時のアメリカ人にとって、このようなカレッジは運河や鉄道と同じように、辺地に一大進歩をもたらすものとして期待され、物質的にも、

情緒的にも殺伐な環境での生活から自分達を救い出し、また階級や人種の圧迫からの脱出の道を提供するものとして受取られたのである。そしてこのような初期のカレッジの教育者にとって、辺地に文化をもたらすカレッジの活動への参加は、学問的な活動というよりは、むしろ伝道運動 (missionary movement) に参加するような熱情、使命感、希望を伴ったのであり、それは地上に神の国を建設する願望 *chilastic claim* と呼ばれてもよい程の熱情であった。

初期のカレッジにおけるこのような熱情は、その後のカレッジの設立において、また先に見た十九世紀後半の大学院中心大学への改革において、大学の設立者や大学の総長達の内に受継がれて行く、そして今世紀においては、特に一九二〇年代、及び三〇年代に、使命感や熱情をもったすぐれた総長達の手によって、いくつかの大学において極だった改革がなされたのである。十九世紀後半の改革が、ジョンズ・ホプキンス (Johns Hopkins U.) のギルマン総長、ハーヴァードのエリオット総長、シカゴ (U. of Chicago) のハーパー総長等によって、大学院を充実する方向へ向ってなされたのに対して、この一九二〇年代にはじまる改革は、主としてアンダーグラデュエイト (学部) の教育の改革に焦点がおかれたのである。例えば、ミシガン大学 (U. of Michigan) のクラレンス・クック・リトル、シカゴ大学のロバート・ハッチンス、はじめはアームスト大学 (Amherst Coll.) で後にウイスコンシン大学 (U. of Wisconsin) に移ったアレクサンダー・マイケルジョーン等の各総長が、この時期の改革の立役者であり、彼らの中には、ミシガンのような州立大学の総長も含まれていたが、等しく職業教育には反対であった。そして夫々の仕方において、一般教育 (liberal education) 乃至はリベラル・アーツ (liberal arts) の教育に関心を持ち、これにもとづいて大幅な教育課程の改変を行い、大学院の準備教育機関や単なる職業教育機関に化しつつあるアンダーグラデュエイトの教育の改革と充実をはかったのである。しかしこの一九二〇年代には、またいくつかの衰微したカレッジの再興も行われた。アーサー・E・モルガン総長によるアンティオク・カレッジ (Antioch Coll.) の再興がそれであり、またフランク・アデイロット総長によるスワスマア・カレッジ (Swarthmore Coll.) の再興がそれである。そして特

にこのスワスマアで創設されたオナー・システム (honor system) はその後、アメリカ全土に拡がり、優秀な学生の向上に可成りの程度の役割を果たしているのである。一九三〇年代には、またベニングトン (Bennington Coll.) とサラ・ローレンス (Sarah Lawrence Coll.) とが二つの実験的な女子大も設立された。これは従来の女子大学の型を破ろうとしたもので、誰にも一様の教育を与えるのではなく、学生数を少なくし (どちらも四〇〇人ないし四五〇人)、学生一人一人の個性と才能と必要に応じた教育をしようとするものであった。例えば芸術教育では美術、音楽に関する知識よりも芸術活動そのものが中心とされ、また各学生には助言教師がついて、各自の個性と才能の発見に意が用いられると共に、不得意学科にも関心をもつような指導がなされたのである。

しかしながら、リースマンによれば、このような大学に対する熱情や改革は、全体としてみれば、一九三〇年代で終り、今日のアメリカの大学には、殆んど見られないのである。リースマンはこう語っている。

「わが国の大学は、徹底的な改革を必要とするのだが、全体的にいつて諸大学がその改革のあきらかな必要をみたすにつれて、わたしたちの大学生活でかつては非常に顕著な特徴であったあの革新と実験の酵母が今や次第に発酵しなくなっている。」^⑧

一般的にいつて今日の大学の状況においては、リベラル・アーツの教育によって高い地位を占めていたカレッジは、次第にユニヴァーシテイ (綜合大学) によって圧倒されつつある。そしてユニヴァーシテイは、その殆んどが大学院をもち、大学院における調査研究に関心をもつことにおいて、かつての改革の焦点であったアンダーグラデュエイトの教育にはあまり関心をはらわなくなってきた。

そしてまた、ユニヴァーシテイは、規模を拡大し、それ自身制度化し、大企業や政府機関との「制度的同質化 institutional homogenization」をおこすことによって、これらと類似した存在となり、改革が困難になると共に、また大学と社会特に産業界との結びつきが密接になり、大学が社会の責任を分持たされて、H・D・ラスウエルの言う「部分

的妥協による制限 restriction by partial incorporation」の状況を生来し、改革的側面を大幅に制限されているのである。

また、リースマンによれば、アメリカの大学における改革的熱情の欠如の一因には、「明確なモデルの喪失 the loss of obvious models」があげられる。つまり、かつて、ジョンズ・ホプキンス、ハーヴァード等は、ドイツのベルリン大学やゲッティンゲン大学をモデルにして改革を行い、カレッジをユニヴァーシティにし、大学院を強化することに成功した。しかし、今日のアメリカの一流のユニヴァーシティ（ハーヴァード・コロンビア・シカゴ等）には、もはやこのようなモデルはどこにもないのである。このような大学は、少くとも大学院レベルでは今日世界の最高水準を行くものであり、今日では、ヨーロッパやアジア等の諸外国がこれらの大学をモデルにし、ここへ留学し、また教授をまねいてこの方式を取入れようとしている程である。そしてこれらの最も進んだ大学を悩ましている問題は、今後アメリカの大学はどこへ行くべきかという問題——今日までは同列の他の大学を見くらべることによってどうか引のばして来た問題——であり、ここに、これらの大学には「成功の窮境 the stalemate of success」といった現象が見られるのである。

しかしながら今日のアメリカの大学においても、改革運動は全くななくなってしまったわけではない。しかし、かつての如く大学の総長を中心として、小さな教派的カレッジを大きなユニヴァーシティへ変えるような大規模な改革は、もはや今日では見当たらない。改革は小さな辺地の大学の中でか、また大きな大学の学部の中で小規模に行なわれている。改革の立役者は、今日ではもはや偉大な総長ではなく、むしろ学部長 (dean) である。リースマンはこれらの学部長の手によってなされた改革の中にも、例えばハーヴァードの一般教育 (general education) の計画、M・I・Tの人文主義教育 (humanistic education) に、またミネソタ大学の教養部 (general college) において、静かではあるが、根本的な改革がなされつつあるのを高く評価するが、しかし一般的には、リースマンは、シカゴ大

学のロバート・ハッチンスを最後として大学が偉大な人物の活躍する場所ではなくなったこと、またアメリカの「最も大きな大学においては、改革は制度化され、偉大な革命的人物の現われる余地がなさそう」なことを、悲観的な調べをもって語るのである。

註⑫ Riesman, *Constraint and Variety in American Education* p. 11. 訳文は新堀・片岡徳雄訳による。

註⑬ *Ibid.* p. 13 かつては敵だったものを自分の側にとり入れることによって、制約され、制限されることを言う。

註⑭ *Ibid.* p. 22.

IV

リースマンがアメリカの大学の分析においてとり出している第二の問題は、「他人指向型」社会における「他人への同調性」を反映する「大学の行列 *academic procession*」乃至は「大学の類質同形化 *academic isomorphism*」¹⁵の問題である。

最初の節において、わたしは歴史的な観点から、アメリカの大学にある四つの類型について述べたのであったが、リースマンによれば、これらの諸類型の大学が一つの行列をつくり、互に他を気にしながら進んでいるのがアメリカの大学の現状である。そして特に近來、これらの大学の間には「全国化 *nationalizing*」の傾向が強まり、地方的な大学の多くも地方的でなくなり、全国的なモデルに追従する傾向があるのである。そして先頭から末尾にいたる大学の行列は、あたかも蛇の蛇行運動 (*snake-like procession*) に似て、胴の動く方向にはもはや頭はいないというぐはぐな、テンポのずれた行列であるとリースマンは言うのである。

行列の先頭には、所謂アイヴィ・リーグ (*Ivy League*) の諸大学、つまり、大学院中心の大学及び優れたリベラル・アーツ・カレッジが並んでいる。しかも、この中での大学がトップに居るか、またリーダーはどれかというこ

とはそのトップ争の激しさもあって、今日では次第に決めにくなっている。かつては、大きさ、資力、歴史等が大学を格づける規準であったが、今日ではこれらが必ずしも絶対的な規準ではない。またかつては、ハーヴァード大学が全国的なモデルであり、ハーヴァード大学ならば国内のどこからでも教授を招き得たが、今日では事柄はそう簡単には行かない。著名な学者を出した比率が判断の規準になる場合もあり、この場合には、リード (Reed Coll.) スワモア、オベリン (Oberlin Coll.) アーモスト、アンティオク等の小さなカレッジが上位に数えられる。しかしこれもまた絶対的規準ではない。それ故結局今日のアメリカの一流大学の中には、かつてのハーヴァードのような単一の「威信体系 prestige system」乃至は単一のモデルはなく、「威信体系」は複雑になり、渾然とアイヴィ・リーグの諸大学が行列の先頭に居る前衛的大学 (the avantgarde) であるという外はないのである。しかも、事柄を大学院のレベルに限定して考えるならば、このようなアイヴィ・リーグの諸大学の外に、先にわたしが第三のタイプの大学として扱った州立大学も、近來その大学院を充実させるものの数が非常にふえ、これが前衛的大学の中に加わって来ている。ウイスクンシン (U. of Wisconsin) 、ミネソタ (U. of Minnesota) 等の大きな州立大学はかなり以前からペースメーカーであったが、近來その勢は、量質ともにアイヴィ・リーグの諸大学をしのぐ程であり、このことによって「威信体系」はより複雑さを増していると云えよう。

しかし、このような前衛大学にも幾多の問題がある。今「大学の行列」について語る前に、このような前衛大学での問題について考察しておくならば、前の節でふれた「明確なモデルの喪失」もその問題の一つであるが、今一つの問題は、アンダーグラデュエイトの教育ないしは一般教育の弱体化の問題である。大学院中心のユニヴァーシティにおいては、大学院の充実に反比例してアンダーグラデュエイトが弱体化している。これらのユニヴァーシティにおいては、教授達特に理科系の教授達は、研究教育 (research professor) であることを期待されている。つまりこれらの大学に対する連邦政府や諸財団からの調査研究の要望は近來ますます増加しており、またこのための予算もぼう大

なものの（例えばプリンストン大学では、平均して各人が年間十二万ドル）であるから、大学は競ってすぐれた教授を集めようとする。またこれらの大学の教授の職責は、大学院学生を助手として役立つように強化し、弟子を訓練育成することであり、一般のアンダーグラデュエイトの学生の面倒をみることは第二義的だと考えられるようになっていく。したがってこれらの教授達がアンダーグラデュエイトを教える場合、学生の人格的成長への関心を欠く場合が多く、また学生の能力を充分に展開させることの出来ない事態もおこるのである。そして学生達にとって、これらの教授達は、あまりにも学者でありすぎて、学生に威圧感をあたえ、また学生の独立心を失なわしめる存在だと感じられることも多いのである。リースマンはアンダーグラデュエイトの教師の条件について次のように言っている。

「自分自身の学問に没頭すると同時に、その学問を通して自分のの学生を成長させることにも献身する教師であれば、彼の知識がいかに広く、また最新のものであっても、学生が独立することを妨げないものである。……教育が意味をもつためには、教育は学生のもっている現在の関心と接触しなくてはならないと同時に、教育はさらにまた、たんに方法や主題の新奇さというよりはむしろ新鮮な感覚、新しい見方を伝えなくてはならない。したがって、学生を、何というか無感動な事なかれ主義の奴隷に仕立て上げるような教師は真に創造的な教師でなく、現代の文芸や科学の大学院が選抜し育成するような学問上の勝負師に仕立て上げる教師こそ、真に創造的な教師なのである。——少くとも人文科学や社会科学にあっては。」

しかしまた、アンダーグラデュエイトの教育が、単に大学院の準備教育機関になり、大学院の予備校化することには問題がある。近來大学院へ進む学生が非常に増加（ハーバードでは八十六％）したことによって、このような予備校化はユニヴァーシティのアンダーグラデュエイトにおいてだけでなく、大学院をもたないリベラル・アーツ・カレッジにおいても認められるようになったが、リースマンは、このことに疑問をもっている。リースマンによれば、アンダーグラデュエイト四年間と大学院の三年乃至四年、合計七、八年間をぶち通しに教えられねばならないような重

要な科目は恐らくなく、もしあるとすれば、それはまだ十分系統づけられていない科目であるか、人々の興味を呼び起こすような抽象化が未だなされていない科目である。それ故、将来大学院で専攻する学科目をアンダーグラデュエイトで準備するというのではなく、アンダーグラデュエイトにおいては大学院とは全く独立したカリキュラムが設けられ、各分野での成果を総合的に取扱う「総合教育 interdisciplinary」がその中心となるべきだとリースマンは考えている。

だが、このような「総合教育」を強力に押進めるには多くの障害がある。先にふれた如く、ユニヴァーシティの教育が、研究の助手の養成を第一義としていることもその障害の一つであるが、学生の教育に献身している教授の方が、有名な研究教授よりも、待遇その他の点で低い地位におかれるということ、また研究活動を犠牲にして教師として献身することは、全国的な名声を犠牲にし、他大学への移動の自由を失うということ等のよりプラグマティックな理由も、今一つの障害である。

一方、学生の方もアンダーグラデュエイトの教育をあまり重視していない。リースマンは言う「今日アメリカの学生の大部分にとつての重大な関心は、将来の職業または就職の問題にあるといえる。学生達は、よりよい職業にあつたためのパスポートをとるために在学しているのである。……」そして彼らにとつては大学院の専門課程は、就職の好条件をつくるためのものであり、またこれに対しては真剣に立向うが、一方アンダーグラデュエイトの教育、特に一般教育はそれ程重要ではなく、かえつてそのために専門課程の学習が遅らされる邪魔なものだとさえ考えられているのである。

しかし右のような障害と共に「総合教育」を押し連めるにあつての今一つの重要な困難は、学科の間の「割拠主義 departmentalism」の問題である。リースマンによれば、アメリカの大学には、学科間、学問間の対立があり、これが、「総合教育」の計画にあたつても、その計画を難行させると考えられる。

アメリカの大学における学科間、学問間の対立は、古くは十七世紀における信仰と科学の対立、特に福音主義的ファンダメンタリズム (evangelistic fundamentalism) による科学への敵対にその根をもっている。この信仰と科学の対立の問題自体は、今日、前衛の大学では、解決済みの問題であり、後に述べる最も後衛にある大学においてのみ問題になることであるが、しかし新興の諸学問や学科に対して、古い諸学問や学科が常に「知的拒否権グループ intellectual veto groups」の役割を果たし、新興勢力を圧迫するために「割拠主義」をよりどころにするという形では、今日まで続いている問題である。

問題を社会科学の分野に限定して考えるならば、十九世紀においては、経済学がこのような新興社会科学のにない手であり、また異端であった。道徳哲学から分離し、経済的な交換や取引の分析に向った当時の経済学に対しては、カトリック教徒や実業家からの白眼視だけでなく、古典学者、言語学者、哲学者達による軽蔑や圧迫も見られたのである。

しかし、二十世紀の今日においては、経済学はもはや新興科学ではない。リースマンによれば、社会科学の分野において、今日これにかわるのは、人類学、社会学、社会心理学、異常心理学等の分野である。そしてこれらが、社会科学の中の古い勢力である経済学、歴史学、政治学等と対立しているのである。そしてこのような対立が特に明確な形をとってくるのは、新興分野に学生の関心があつまり、学生数が増加し、そこに講座、学科乃至は学部が新設され、それによって従来の分野の既得権がおびやかされる場合である。例えば、ミシガン大学での異常心理学講座やシカゴ大学での「文化とパースナリティ」の諸講座などは、今日でも最も学生の関心と呼ぶものであるが、これらが盛んになることに對して、他の社会学者からしばしば非難、反発があったこと、また一九四六年にハーヴァード大学に社会関係学部 (the Department of Social Relations) が新設され、二年程の間にこれが非常な勢いで興隆した時、同様な攻撃があったことをリースマンは記しているのである。^⑧

しかし以上のような対立が歴史的に蓄積されてくると、研究者の間には自己の学問に対する異常なまでの忠誠心が

育って行き、これが根強い「割拠主義」の温床となつて行く。アメリカの大学では、共同研究等の必要上からしばしば学部長等の手によって、社会諸科学間の統合が試みられることもあるが、これは今のところ殆んど失敗に終っている。そしてまた、ここでの本題であるアンダーグラデュエイトの「総合教育」の計画も、以上のような学問間乃至は学科間の対立、学科の「割拠主義」乃至は「既得権」の壁につきあたることによって難行をつづけているのが現状である。リースマンは見ているのである。しかしながら、アンダーグラデュエイトの教育のこのような弱体化の現状に對して、希望は全くないであろうか。ここにリースマンは、未だ実験の域をでないけれども、希望をあたえるようないくつかの計画について語っている。それ故、われわれはこれについてふれなければならないが、しかし、その前にわれわれは、この小論の本筋に立かえり、「大学の行列」及び「大学の類質同形化」の問題に關連をもつ前衛にある大学以外のアメリカの大学とその問題点について述べておかねばならない。

註⑤ Ibid. p. 26

註⑨ Ibid. Anchor Edition 新堀・片岡訳 五三一四頁

註⑫ Ibid. p. 65—66

Ⅲ

「大学の行列」において、前衛的な一流大学の後につづくのは、リースマンによつて「中流大学 middle ranks」と名づけられる末だ前衛には達しない地方の州立大学、及び教員養成大学 (teachers college) 及び小さな宗派的カレッジ (Small denominational college) である。そしてこれらの大学の一般の傾向は、先にふれた「全国化」及び「類質同形化」の動きであり、全国的な規準において高いレベルにある前衛的な大学を目指しての昇格運動であるといえる。地方の州立大学や教員養成大学は、充実した大学院をもつユニヴァーシティを目指し、小さな宗派的カレッ

ジは、優秀なりベラル・アーツ・カレッジを目標とする。そしてそのために前衛大学出身の教授を招聘し、大学の研究色を強くし、内容の充実をはかろうとする。

しかし、問題はこのような「中流大学」の昇格運動は、確かに一種の改革的前進運動ではあるのだが、しかしそれは常に目を前方に向けての「同調的」前進であり、そしてまた、地方的な特色やその大学の独自性を生かしながらの前進ではなく、全国的な規準を気にしての、あるいは前衛的大学を模倣してそれとの「類質同形化」をはかるための前進であることである。それ故このような大学では、ペースを造る一流大学が計画をたて、コースをかえるときには、全く気落ちしてとまどうという現象も起るのであり、総じてこのような前進運動は、真に創造的な改革的前進運動であるとは言えないのである。

しかしながら、このような「中流大学」の全てが目を前方に向け、前進をつづけているわけではなく、行列の最後尾に視点をあわせ、大学を後退させようとしているものもあれば、また今まで進んで来て、これ以上は進もうとしない大学もある。

尤も、一般的には、「中流大学」は先に述べたような前進運動をつづけているものの方が多いのであるが、しかしまた、前進する「中流大学」においても、その大学の全てのメンバーが、この前進を支えているわけではない。そこには、昔からの伝統を守ろうとし、大学を昔からの目的に引もどそうとする人々もいるのである。リースマンは、前進する「中流大学」に最も多く見られるこのような対立を、「コスモポリタンス cosmopolitans」と「ローカルズ locals」の対立と名づけている。^⑧

ここで「コスモポリタンス」と呼ぶのは、大学が昇格運動、前進運動をする必要上、招聘した教授達であり、多くは前衛大学の大学院で博士論文を完成して、教壇へ立つべく地方の州立大学等の「中流大学」へやって来た人々である。これらの人々は、ドイツの大学やイギリスの大学、また自らの出身大学等でつくられた大学の正しかるべきイメ

ージを抱いてこれらの大学へくる。彼らは、研究中心のカリキュラムを重視し、また少数精鋭の学生の教育を重んずる。そして総じて彼らは、自分の出身大学の世界で物事を考え、このような大学を自らの出身大学に出来るだけ近づけようとする。

これに対してリースマンが「ローカルズ」と呼ぶのは、また「地方防衛隊 home-guard」乃至は「原住民保護主義者 nativist」とも名付けうる人々であり、大学の全国的な規準へ向っての前進や研究に関心をもつよりは、極めて強烈な愛校心を持ち、伝統を重んじ、また学生や地方に対する奉仕的機能を重視する人々である。彼らの多くは地方の需要に応ずるために、学生数を増し、学科をふやし運動競技を盛んにすることを希望する。そして多くの「中流大学」のいくつかの学科で見られるように、この「ローカルズ」は、これらの学科のスタッフを自家製の人材ばかりで固め、研究上における不愉快な比較を避けようとする場合もあるのである。

リースマンはこの両者のどちらかを一方的に肯定しようとはしていない。「コスモポリタンズ」は自らの抱く大学の理念をあまりにも性急に押つけることによって、その地方の特殊性やその大学の独自性を全く無視し、大学を空中楼阁化する危険性をもっている。しかしまた、「ローカルズ」は、「コスモポリタンズ」を攻撃、非難し、大学における学問の自由や研究を侵害するという点でより多くの難点をもっている。両者が協調的である場合には、両者は相互補足的にはたらか合い、大学を創造的に前進させるのだが、ただ一般的には、両者が対立している場合の方が多く、このことによって、夫々がもつ危険性や難点が顕在化し、大学の前進が矛盾の様相を示すことが多いのである。

更にまたこのような「中流大学」における問題としては、所謂マス・プロ教育の問題がある。つまりこのような大学の多くは、「教育の機会均等」の原則から、たえず学生数を増加し、莫大な学生数をかかえているものが多いが、このことにおいて、学生の大衆化、またアンダーグラデュエイトの弱体化が起っているのである。そしてこの様な学生数の増加に対しては「コスモポリタンズ」は反対し、「ローカルズ」はこれを地方へのサーヴィスとして歓迎する

という傾向が一般にみられるようである。

結局アメリカの「中流大学」は右のような問題点をもっている。しかし、このような「中流大学」をその後にくく、「後尾大学 the tail」に比べれば、はるかに問題点は少いといえる。

リースマンによれば、「大学の行列」の後尾に位する大学としては、小規模なカトリック大学、南部プロテスタントの教派的カレッジ、及び一部の教員養成大学が数えられる。これらの大学は一般的に言って、全く改革乃至は前進への意欲を失い、ただ過去のみをふり返り、伝統のみに執着している大学である。そこには「中流の大学」にみられる同調的前進もない。そして知的な面においては、停滯、後退を続け、その水準が高校以下のものもあり、また大学基準協会の認定もえられないようなものが多い。特にこのような段階にある宗教的、教派的カレッジにあっては、学問よりも教義や教団への一体感の方が強く、そこでは、しばしば学問と信仰の混同がみられるのである。そしてまた、学生の質も悪く、教授達に生甲斐を感じさせるに足る優れた学生は見あたらないのである。

このような段階の大学にいる「ローカルズ」とっては、このような非学問的な環境も、知的な面での水準の低さも、殆んど苦にならない事柄である。しかし、「コスモポリタンズ」とっては、このような環境は苦痛であり絶望を与えるものでしかない。リースマンはこう言っている。「立派な大学院をでながら、自分の今の学校や境遇を変え希望も、エネルギーもなく、こうした場所に島流しになっている教授こそ最もうらさびしい、悲たんにくれた人なのである。こうした人々に無限の自信か、使命感をもつ牧師のような聖者精神がない限り、彼らがどうあがこうと破壊があるのみである。」^⑨

そして結局、「後尾の大学」は、このままの状態がつづき、そこに何らかの変革乃至は前進の意欲があらわれないかぎり、やがては消滅の運命にあるとリースマンは考えているのである。

以上がリースマンの「大学の行列」における夫々の段階の大学がもつ問題点である。そしてここまでわたしが、リ

リースマンの大学論を「改革的熱情の欠如」と「大学の行列」乃至は「類質同形化」という二つの点にしばって述べて来たことを通して、彼の大衆社会論と大学論の関わりや、大衆社会にあるアメリカの大学の問題点がほぼ明らかになつたことと思う。ここに見られる如く、総じてリースマンは、アメリカの大学に対して批判的であり、各段階、各類型の大学に固有な問題点を指摘するが、しかし彼にとって一番の関心事であり、また最も改革を必要だと考えているのはアンダーグラデュエイトの段階であろう。大学院のレベルにおいても「明確なモデルの喪失」といった問題はあられるけれども、しかし現在、世界の最高水準にあるこの大学院での問題は、「成功の窮境」という言葉そのものが示すようにそれ程深刻な悩みではない。そしてまた「後尾の大学」の状況は手がつけられない程絶望的である。それ故このアンダーグラデュエイトの段階での問題が、「前衛大学」においても、また「中流大学」においても、現在最も改革を必要とし、また改革可能な問題であるとリースマンは考えるのである。尤もその改革は、「改革的熱情の欠如」が一般的である大衆社会の大学にあつては、決して容易に行われることではない。しかし、リースマンは、このような状況の中にあつても、部分的、実験的ではあるが、このアンダーグラデュエイトの弱体化を改革、強化するような試みがあることを指摘し、これにいくらかの希望を見出しているのである。

註⑧ Ibid pp. 26—29

註⑨ Ibid p. 51

VI

リースマンがアンダーグラデュエイトの弱体化に対する対策として、そこに希望を見出している第一のものは、優れた大学院をもつ「前衛大学」のアンダーグラデュエイトにおける一般教育重視の計画である。リースマンは過去数十年にわたってシカゴ大学、コロンビア大学、ハーヴァード大学という三つの代表的な大きな大学で行われて来た

独自の一般教育のプランを高く評価する。^⑨これらの大学はいずれも大学院の充実によつて強まって来た教育の専門化、職業化をゆるめようとし、アンダーグラデュエイトを大学院の準備課程にしないためのカリキュラムを工夫したのである。たとえばシカゴ大学においては、附属高校の後期二年と大学の前期二年で四年間の一般教育のプランをつくり、人文科学、社会科学、自然科学の各分野にわたつて、入門的段階、集中的段階、批判乃至は応用段階を含み、また夫々の分野内での諸学問の関連を示す総合的カリキュラムがはじめの三年間で施行されると共に、最後の一年は、特に人文科学と社会科学とを関係づける「総合コース integration course」が設定されている。そして、コロンビア、ハーヴァードの両大学においても、夫々の特色はあるが、基本線に関してはほぼ軌を一にするカリキュラムが組まれている。特に、人文科学においては、いづれも、「……について」の知識よりも、原典が重んじられ、ハッチンスの提唱する「グレイト・ブックス・カリキュラム Great Books Curriculum」にみられるような哲学、文学、宗教等に関する古典の理解が基礎とされ、またこれらを通しての自己の立場の確立や批判的精神の養成等が目指されている。また社会科学においては、諸学問の断片的知識を教えるのではなく、たとえば、コロンビアの「近代文明」のコースやハーヴァードにおける「西洋思想と制度」のような共通のテーマが、社会諸科学（時には人文科学を含む）の協力の下に、始から総合的に扱われることが目指されたのである。そしてまた、自然科学の分野においては、将来この分野に進むと否にかかわらず、共通の自然科学の総合コースが全ての学生に課せられ、科学的思考法乃至は科学的方法を学生に熟知させることが企てられた。更に、一般的に、読書能力や外国語の学習が重視されたのである。

リースマンは、このような一般教育の計画が、専門を重視する教授達、また就職のための有利な条件を期待する学生や親達によつて、当初よりは可成り水増しされたものとなっていることを、残念に思いながらも、なおこれの継続と発展に期待をよせているのである。

しかしリースマンは、このような計画と共に、一般教育重視に関するなおいくつかの新しい計画についてふれている。その一つは、特にリースマン自身が関係するハーヴァード大学における計画であるが、それは新入学年を対象としたセミナーであり、約三十名の異った学部教授が、それを担当しているものである。このセミナーのねらいは、早期専門化の防止であり、学生が自ら興味がないと思ひ込んでいる課目や、自己の専門のために必要でないと考えているような課目の講義に、その学生を出席させ、それを報告させ、学生相互で討論させるといったセミナーである。そしてリースマンは、このセミナーに参加した学生達に、共通の広範な知的経験をある程度与え得たであろうと確信するのである。

今一つの新しい計画は、優れたリベラル・アーツ・カレッジであるボードワン・カレッジ (Bowdoin Coll.) の計画であるが、ここでは通常の大学とは異って、専門教育の後に一般教育を置くことが試みられている。このカレッジがもつ理論によれば、自己の才能をのばすことに最も強い関心を抱いて大学に入ってくる新入学生にすぐに一般教育をあたえてもあまり効果がなく、それよりは、自己が満足する程度に専門教育を受け、自己の才能をのばす機会をあたえられた後に、一般教育を実施した方が、効果的であると言うのである。そしてリースマンはこの計画が、はじまったばかりの実験的なものである故に、その成果に対しては将来を待たねばならないと考えている。

今までのべた三つの一般教育重視の計画は、所謂アイヴィ・リーグに属する大学院中心の大学及び、大学院の予備校化の傾向のみえるリベラル・アーツ・カレッジでの計画であった。しかし、このような大学とは異なる州立大学においては、異なる問題があり、これに対する計画が必要となる。州立大学の中には、アイヴィ・リーグの大学を凌駕するような立派な大学院をもつ「前衛大学」もあり、また「中流大学」もあるが、しかし、アンダーグラデュエイトの段階においては、その多くは、マス・プロ大学になりつつある。つまりカリフォルニアの三万五千（バークレーだけ）、ミシガン大学及びミシガン州立大学の夫々二万五千の学生数に見られるような規模の大きさが、大都会に埋没

する人間と同じように、学生の大衆化、劃一化を引きおこし、学生の自己喪失をもたらしてくる。教授と学生の人格的な教育的交渉などは、のぞむべくもなく、教授は学生達にとって遠くはなれた彼方の「彼ら」でしかなく、又学生達に対する教授においても事情は同じである。そしてこのようなマス・プロの問題に対する対策として、リースマンは、ミシガン州立大学 (Michigan State Univ.) とウェイーン州立大学 (Wayn State Univ.) の実験に注目する。つまり両者の実験は、これらの大学のマンモスの規模を打こわし、これを小さなカレッジに分散し、大学を人間らしい規模に引戻そうとする試みの手はじめである。ミシガン州立大学は、数年前に四十マイル程離れたところに、一学年四百名の四年制のリベラル・アーツ・カレッジを新設した。そしてウェイーン州立大学の方は、ほぼ同じ頃、一学年三百名のモンテイス・カレッジ (Monteith Coll.) をつくり、ここで二年間一般教育を教え、後二年は、本校に送ることになっているのである。両者共無試験で学生を入学させ、優等生でもなく、大学院志望でもない学生に東部のリベラル・アーツ・カレッジ式の教育を行おうとしている。つまり、多くのアサインメントを課し、少人数のクラスで、隔意なきデスカッションを行い、教授と学生の親しい人格的交りを緊密にしようとする。そして特にモンテイス・カレッジでは、このカレッジを経たものと、ウェイーン州立大学の普通の課程を経たものの違いを調査し、このカレッジが可成りの成果をおさめていることを明らかにしている。ミシガン州立大学の新しいカレッジの方は、このカレッジの周辺の郡部の出身の学生を集めている故に、教授達の意図と学生の意図がくい違ふことがあり、モンテイス・カレッジ程成果をあげてはいないが、ともあれ、リースマンは、このような二つのカレッジにおいて実験的にここみられた計画にマス・プロ大学の問題点を解消する有力な方向を見出し、これに期待をつないでいるのである。以上がリースマンの注目するアメリカの大学における改革の方向へのささやかな実験的試みである。そして結局、このような実験を拡大し、これをくり返すことにおいて、彼は大衆社会にあるアメリカの大学が、その最大の問題点であるアンダーグラデュエイトの弱体化を解消し、大学としての創造的な機能を發揮することができるようになること

考えているのである。

註② この三つの大学での一般教育計画は夫々次の報告書にあきらかである。

- 。 The Idea and Practice of General Education—An account of the College of the University of Chicago by Present and Former Members of the Faculty —
- 。 A College Program in Action— A Review of Working Principles at Columbia College by the Committee on Plans —
- 。 General Education in a Free Society—Report of Harvard Committee—

註③ このような一般教育重視の計画をつづつた Howard M. Jones 及び Robert Ulich との共著 The University and the New World 中の New Experiments in American College に見られ、また、日本での講演集の中の「アメリカ大学教育の諸問題」に見られる。

【追記】 この小論は文部省科学研究費による「日本の高等教育に対する社会的要請の総合的研究」（京都大学教育学部）との関連において記したものである。

David Riesman and University

Résumé

The aim of this paper is to clarify David Riesman's argument about the problems of the universities and colleges in America. According to his analysis of mass society (especially in *The Lonely Crowd*), it is characterized by two factors: (1) political apathy and (2) conformity with the others. But how do the contemporary universities and colleges reflect these "other-directed" characteristics?

My point is that similar characteristics are found in his discussion of university problems (*Constraint and Variety in American Education* and other essays): they are (1) the loss of enthusiasm for reform and (2) the tendency of "snake-like procession". Against this background, I have studied various aspects of problems in the American higher education.